

## 筑紫に咲いた和歌と漢詩の華ふたつ

一、「令和」のゆかり・大宰府 大伴旅人  
二、「詩文」の神さま・大宰府 菅原道真

松浦利弘

### 序

新元号の「令和」は、万葉集のゆかり・大伴旅人の「序文」から採られた。筆者の属する「横野万葉会」ゆかりの歌は、「紫草の根延ふ横野の春野には君を懸けつつ鶯なくも」(巻十一・一八二五・詠み人知らず)である。令和記念を志す本稿は、旅人の「梅花の歌」三十二首を中心に筑紫万葉の世界を探究して来た。紫草むらさきゆかりの万葉歌十七首中には、旅人を詠んだ歌の一首があるが、漢詩で名高い菅原道真が配流(はいり)先の筑紫で、紫草ゆかりの和歌を遺していることを知った。

旅人は千三百年前の人、道真はそれより百七十年ほど後の人である。時代は違うがこの二人は、「和歌」と「漢詩」の異なる世界で、それぞれが独自に貴重な文化の華を咲かせた、と断言できるのではないか。そう思うと矢も盾もたまらずお二人にお会いしたくなり、コロナ禍恐怖の中を令和二年三月八日〜九日、単身現地に出かけた。その時筆者は大宰府天満宮で、菅原道真公に関する奇跡的なお出合いに恵まれた(後述する)。

その奇縁に導かれての本稿執筆は、役所名の大宰府と地名の大宰府、大の字の点(・)の有無の違いの認識から出発した。従って本稿のタイトルも二本立てとなった。旅人と道真、和歌の巨人と詩文の神様である。

この二人の人生と人間性、大きな歴史的事績について、この機会に理解を深めて頂ければ、筆者の幸いこれに勝るものはない。

### 一、「令和」のゆかり・大宰府 大伴旅人

#### (一)「梅花の歌」の序文と三十二首の見事な連なり

新元号「令和」は、万葉集巻五の「梅花の歌」三十二首(あわ)せて序」とある「序文」より採られた。典拠部分は、初春令月 氣淑風和 梅披鏡前之粉 蘭薫珮後之香 の「令」と「和」である。初春の令月(れいげつ)にして、氣淑(きよ)よく風和(やわら)ぎ、梅は鏡前(きやうぜん)の粉(こ)を披(ひら)き、蘭は珮後(はいご)の香(か)を薫(か)おす。令(は)は(う)る(わ)し、和(な)は(な)か(やか)の意である。



大宰府の長官である大伴旅人が、正月に役人たちを自宅に招いて、三十二人で梅花の花を題にして和歌を創る「宴(う)貸(か)む」を題にして和歌を創る「宴(う)宮(みや)る」を掲げた。最初の人から満(み)ちる旅人を含む九人と最後の一人天(あま)の歌十首を掲げ、見事な歌の連(つ)なりを鑑賞してみよう。(歌番号は一八五から、最後は八四六)

正月(むつき)立ち春の来たらばかくしこそ

梅を招(まね)をきつつ樂(たの)しきを經(へ)め

梅の花今咲けること散り過ぎず

我が家(うち)の園(うゑ)にありこそぬかも

梅の花咲きたる園の青柳は

かづらにすべくなりにけらずや

紀男人

小野老

栗田太夫

春さればまつ咲く宿の梅の花

ひとり見つつや春日暮らさむ

世の中は恋繁しゑやかくしあらば

梅の花にも成らましものを

梅の花今盛りなり思ふどち

挿頭(かぎし)にしてな今盛りなり

青柳梅との花を折りかざし

飲みての後は散りぬともよし

我が園に梅の花散るひさかたの

天より雪の流れ来るかも

梅の花散らくは何処(いづ)こしかすがに

この城(き)の山に雪は降りつつ

霞立つ長き春日を挿頭せれど

いや懐かしき梅の花かも

旅人の呼びかけに応じて、最初の紀男人は(梅の花を

迎えて楽しい日を尽くそう)と詠い、小野老は(梅の華

よ、我らのこの園にずっと咲き続けてほしい)と受けて

いる。栗田太夫は(この園の青柳もかづらに出来るほど

になった)と流れを転換する。すると山上憶良は(この

梅の花を一人で見ながら春の一日を過(す)のであるう

か)と、一年前に妻を亡くした旅人の孤独な心境を思い

やる。これは親友なればこそ詠える歌。大伴太夫は

(世の中は恋に苦しむものだ、いっそ梅の花になつてし

まいたい)と詠じたので、葛井大成は(梅の花が今真つ

盛りだからみんなの髪飾りにしよう)と沈んだ気分を

陽気にする。ここで沙弥満誓は(青柳に梅の花を手折り

かざして酒を飲み合ったら、もう散ってしまったてもよ

い)と親友旅人に続きをうながす。

旅人は(我らの園に梅の花が散る、これは天から雪が

流れ来るようだ)さすがに主人である。天まで広がる幻

想的な流れで詠いあげる。次の大伴百代は(梅の花散る

のはどこ、そうは言っても城の山には雪が降っていま

すよ」と受けて旅人の雪の風趣を讃えている。この連年の見事さはどうであろう。以下の歌は省略するが、最後の小野田守は(霞立つ長い春の一日をかざし続けても、ますます心引かれる梅の花よ)と全体をまとめて打ち上げている。人数の多さ、宴の風雅ぶり、歌作意の妙、レベルの高さ、音(おん)仮名で「やまと歌」を意識して詠んだ画期的な創作和歌の誕生であった。

### (二) 坂本八幡宮と大宰府政庁跡、観世音寺・鐘楼

梅花の宴が催された大伴旅人の邸宅があった地、坂本八幡宮は社殿整備中で覆いの中にあつた。周辺一帯はいかにもそれにふさわしい景観、境内に「令和」の石碑が建立されている。(候補地には諸説がある)



大宰府政庁跡・発掘復元模型(合成)



令和のゆかり・坂本八幡宮



憶良歌碑

り、道真が聞いたという鐘の音に、思いを巡らせた。



観世音寺



鐘楼



「令和」書碑

### (三) 旅人が筑紫で憶良と邂逅、そして生まれた名歌

大伴氏は天皇直近で軍事に携わった名門の家柄、旅人は神龜四年(七二七)六十三歳で大宰帥(だざいのそち)として再び九州に下向した。中央では藤原一族が権勢を増し、いわば左遷的な格好で地方へ出された旅人の心境は意に満たぬものだった。しかも翌年、愛妻大伴郎女(いらつめ)を亡くした悲しみは深かった。

万葉集に残された旅人の歌は七十二首あるが、晩年の筑紫で六十九首の多彩な歌を詠んだ詩心と情熱は、どこから湧き出たのであろうか。その契機を考察する。

うつくしき人の纏(まき)きてし敷妙(しきた)さの

吾が手枕を纏く人あらめや (巻三二四三八)

亡き妻(うつくしき人)にした手枕、この先もう二度と手枕をする人はいないと嘆く旅人は、脚に腫物ができて死を覚悟したり、同族の訃報や知己(長屋王)の変事に遭遇する。この時彼は「凶問(悪い知らせ)が続くことに対し、自分の気持を詠ったのである。

世の中は空(むな)しきものと知る時し

いよますます悲しかりけり (巻五二七九三)

前文は漢文であるが、この歌は「空(むな)し」と「悲し」を仏教的に表現して余すところがない。この旅人の歌に感動して呼応したのが、山上憶良である。

憶良は渡来人の子といわれているが、六十七歳で筑前守となり旅人より二年前に大宰府に赴任していた。

憶良は旅人の妻が病没した時、慰めの歌(弔文と漢詩)を贈った。弔文は「けだし聞く：ああ痛きかも：ああ哀しきかも」の長文(途中省略)である。

ここから旅人と憶良の間で歌の交流が始まった。お互いに刺激して生まれたのが、万葉集の進化とも言えるべき「漢文と和歌の新文学」・旅人の素晴らしい歌の数々であった(紙数の関係で省略)。旅人は梅花の宴の年末奈良の都に帰り、翌天平三年六十七歳で没し、憶良

は天平四年に帰京し翌年七十四歳で没した。

### (四) 旅人と万葉筑紫歌壇の交友

旅人と憶良を中心に多くの歌を万葉集に残したこの時代は、「万葉筑紫歌壇」と呼ばれる。旅人が大納言になって都へ帰る時に催された、送別の宴を歌に見る。

天離(あまざか)る鄙(さび)に五年(いつとせ)住まひつつ

都(みやこ)のてぶり忘れにけり (巻五二八八〇)

憶良は(田舎に五年、私は都の風俗を忘れました)

韓人(からひと)の衣染(ころもそむ)といふ紫の

心に染(し)みて思ほゆるかも (巻四一五六九)

麻田陽春は(韓国の人が染める紫の衣を召されたあなたの姿が、私の心に染みて思われる)という。万葉集紫草の歌で作者名のある四首の一つ、旅人盛装の威容。まそ鏡み飽かぬ君に後れてや

朝夕(あさゆふ)にさびつつ居らむ (巻四一五七二)

草香江(くさか)の入り江(え)にあさる葦鶴(あしづる)

あなたづたづし友なしにして (巻四一五七五)

これは沙弥満誓が旅人の帰京後に(見飽きないあなたに置き去りにされて、私は朝夕寂しく居るのでしようか)と贈ったのに対し、旅人が歌を返している。旅人が昔入った次田(すきた)の湯、八日夜筆者は現在の二日市温泉に宿泊し湯煙の中で旅人の歌を偲んだ。

湯(ゆ)の原(はら)に鳴く葦鶴(あしづる)は我がごとく

妹(いもうと)に恋(こ)ふれや時(とき)わかず鳴く (巻六一九六一)

### (五) 万葉日本文化の開花、「令和」の意義

万葉の時代、大宰府が中心となる時期は聖武天皇の神龜から天平の初め頃である。旅人主催の盛大な「梅花の宴」、当時「梅」は異国の香の花として賞された。

中国詩文を見事に日本化した「序文」、それを朗々と旅人が読み上げて、次々に梅花の歌を披露した人たちが、その風雅と興趣の見事さは、他に比類するものがない。



旅人歌碑 (二日市温泉)

まさに万葉文化の開花、日本文化の原点と言えるのではないか。そこから生まれた新元号が「令和」である。うるわしく、なごやか、さらに言えば和はやまと、日本である。立派な元号を得たことを喜びたいと思う。

## 二、「詩文」の神さま・太宰府 菅原道真

### (一) 学問の家系三代、文章博士となり儒家官僚の道

菅原道真の家系は土師(はじ)氏であったが、曾祖父の時菅原氏に改姓した。祖父清公、父是善は共に官吏登用試験の「対策」に合格して儒学の実務官僚となり、文章博士(大学で中国の



道真公歌碑・天満宮貸与写真  
「東風吹かば」の有名な歌

文学・歴史を教授する官職になって活躍した。父の代からは菅原家の私塾でも教える「学問の家系」である。

道真は承和十二年(八四五)に生まれ、十歳代から勉学に集中、貞観十二年(八六二)に合格して官僚人生をスタート、三十三歳で文章博士となった。漢詩人としての道真の優秀さは、渤海大使裴頌(はいてい)が「まるで白居易の詩のようだ」と褒めたという。漢詩の優れた才能と早い出世が、妬(ねた)まれ中傷された。

### (二) 讃岐守に赴任職務精励、基経「阿衡事件」で見識

仁和(にんな)二年(八八六)道真は讃岐守に任ぜられた(四十二歳)。地方を視察し、民の苦しみを詩に詠んでいる。真面目な性格で職務に精励した。その頃光孝天皇が崩御して、宇多天皇が即位した(八八七)。

宇多天皇は太政大臣藤原基経(もとつね)を「閑白」に任じ、「宜しく阿衡(あこう)の任を以って卿の任とせよ」と勅を出した。だが基経は、「阿衡の任」には職掌がないと文句をつけ、朝廷に出仕しなくなった(阿衡事件)。

結局宇多天皇が辞令を撤回し、謝罪する格好で事態は収まった。道真は基経に書状を送り、文章を書いた橘広相を罰しないようにと説得している。「文章を業とする」道真ならではの見識を示したものと思う。

### (三) 帰京、宇多天皇(上皇)の抜擢で近臣となり、醍醐天皇の時には右大臣に昇進

#### 醍醐天皇の時には右大臣に昇進

寛平二年(八九〇)都に戻った道真は宇多天皇から、死去した橘広相の後の役割を期待される。翌年蔵人頭になり、天皇持読に大抜擢されて天皇に直接仕える近臣となった。寛平三年藤原基経が没し(五十六歳)、後嗣の藤原時平が参議となった(二十一歳)。宇多天皇はこれを機に天皇親政を行った。

寛平五年道真は四十九歳で参議に任ぜられた。これで公家となり、太政官の議政に参加する地位に就いた。その後の道真の位階昇進スピードは、時平と同じである。(筆者作成「位階昇進表」参照)。

#### 位階を上る一方で、

#### 【位階昇進表】

この頃道真の娘が女御(よめみこ)(天皇の寝所に侍する女性の地位)になった。

寛平八年宇多天皇は讓位し、皇太子敦仁親王が十三歳で践祚、醍醐天皇となった(寛平十年昌泰と改元)。さらに宇多上皇の第三皇子齊世(とよよ)親王が元服し、元服後道真の娘との婚姻がなされた。昌泰二年道真は右大臣に任ぜられたが、自分は抜擢されてきたからと辞表を三度提出するも認められなかった。他方時平は、宇多上皇反対の中を、自分の妹穩子を強

位階	太政官	時平	道真
正一位	太政大臣		
従一位			
正二位	左大臣	昌泰4年(901)31歳 (従二位)	昌泰4年(901)57歳 (従二位)
従二位	右大臣	昌泰2年(899)29歳 (左大臣)	昌泰2年(899)55歳 (右大臣)
正三位	大納言	寛平9年(897)27歳	寛平9年(897)53歳 (権大納言)
従三位	中納言	寛平7年(895)25歳	寛平7年(895)51歳
正四位	上下 参議	寛平3年(891)21歳	寛平5年(893)49歳
従四位	上下		寛平4年(892)48歳
正五位	上下		仁和2年(886)42歳 元慶3年(879)35歳
従五位	上下 少納言		貞観16年(874)30歳 貞観12年(870)26歳
正六位	上下		

引に入内させることがあった。宇多上皇は東寺で灌頂(かんじょう)を受けて落髪、宇多法王となった。昌泰三年道真は右大将の辞職を申し出たが、天皇は認めず、進退窮まる状況になった。この間に道真は、祖父清公、父是善、自分の歌集全二十八巻を醍醐天皇に献上した。(『菅家文章』として伝わる)

(四) 藤原時平の讒言により大宰権帥に左遷  
昌泰四年(九〇一)正月七日、時平と道真は共に従二位に叙された(位階昇進表参照)。その二十五日、突如醍醐天皇の宣命が下された。曰く「大臣の官を停めて、大宰権帥となす」と。罪状は「醍醐天皇の廃立を計画」、つまり道真は、自分の娘を妻としている醍醐天皇の弟、齊世親王を天皇に擁立しようとした、というのである。「讒言(ざんげん)とは、「人を陥れるため事実を曲げまた偽ってその人を悪く言うこと」だ(広辞苑)」。では、廃立計画はあったのか、時平側のでつち上げ説というのが一般的理解である。宇多天皇の道真抜擢、過度の厚遇、齊世親王と道真の娘との婚姻、道真の昇進が時平と肩を並べるに至って、脅威を感じた時平が醍醐天皇に讒言したものと思われる。(背景には、藤原一門による世襲的な権力の維持と、天皇の外戚的地位の独占があった)

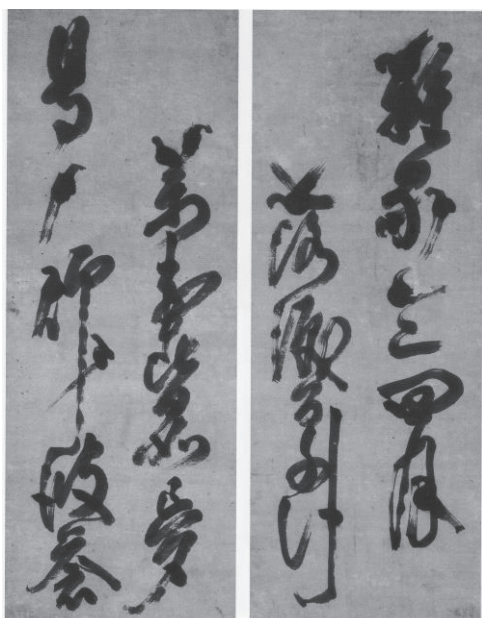
(五) 大宰府で謫居二年・心境を漢詩に、五十九歳没  
二月一日、道真は大宰府に向け出発した。その時に詠んだのが有名な「東風ふかはにほひおこせよ梅の花あるしなしとて春なわすれそ」の歌である。しかし、その旅には護送の役人が付き、食料・駅馬も支給されなかった。子供らも左遷、妻も都に残された。実に悲惨苛酷な旅であった。配流された大宰府の南館(榎寺)は、雨の漏る陋屋(ろうおく)だった。わびしい謫居(たつきよ)(罰を受けての



配流の榎寺

生活の中に、道真は実に三十八首もの漢詩を詠んだ。これらを死の直前に都の友人・紀長谷雄に送った。今に伝わる『菅家後集』である。

さてここで私事を挿入する。筆者の願いは、天満宮宝物殿の道真公「真筆と伝わる『五言絶句双幅』を拝観することであった。コロナ禍で休館と聞き絶望したが、地下の文化研究所に来るようにと係の女性に言われ当日参上、社務所に案内され応接室で味酒安則(みさけやすのり)権宮司様から『五言絶句双幅』のコピー(A4)を頂戴する光栄に浴した。恐懼感激、思わず全身に靈気が走った。その後詳しく学んだ筆者は、道真公『五言絶句』を『万葉講演資料』と雑誌「あした」第二十三号原稿に縮小掲載させて頂きたいと熱望する思いになった。味酒権宮司様から頂いたアドバイスを頼りに、四月二十日「許可お願い」を送付、五月二日西高辻信宏宮司様名の正式「許可書」を拝領した次第である。ここに太宰府天満宮様に畏み謹んで感謝申し上げ、菅原道真公の「自詠」『五言絶句双幅』(伝管公筆)を掲げさせて頂く。



道真公『五言絶句双幅』(伝管公筆)  
(太宰府天満宮宝物殿所蔵)

### 「自詠」(じえい)

家を離れて三四月 落つる涙は百千行 万事皆夢のごとし 時々彼の蒼を仰ぐ

(家を離れて三、四カ月が過ぎた。思えば涙が限りなくあふれる。すべてがまるで夢のようだ。今は時折、天を仰いで祈るだけである(筆は「鳥点ちようてん」の筆法)で、鳥がいる。飛んで帰りたい願いを表現している)

続けて、著名な漢詩二篇を掲げる。

### 「九月十日」

去年今夜侍清涼 秋思詩篇独断腸

恩賜御衣今在此 捧持毎日拜余香

去年の今夜清涼に侍す 秋思の詩篇独(ひとり)断腸 恩賜の御衣今ここに在り 捧持して毎日余香を拝す

(去年の今夜宮中の清涼殿で天皇の傍近くにいた。「秋思」の題で詩を作れと言われ、私は腸を断つような思いを込めた詩を奉った。お気に召して御衣を賜った。筑紫まで持ってきたが今は捧げ持つて、毎日余香をかいで天皇様をお慕いしている)(無実の罪を着せられて流されても、左遷を決めた天皇を恨みには思っていない)

### 「不出門」(門を出でず)

一從謫落就柴荆 万死兢兢踟躅情 都府樓纔看瓦色

観音寺只聽鐘声 中懷好逐孤雲去 外物相逢滿月迎

此地雖身無檢繫 何為寸步出門行

一たび謫落(たくらく)せられて柴荆(さいけい)に就きしより 万死(ばんし)兢兢(けいけい)たり踟躅(ちとじゆ)の情

都府楼(とふろう)はわづかに瓦の色(わのいろ)を看(み)む 観音寺(くわんおんじ)はただ鐘の声を聴(き)くのみ 中懷(ちゅうわい)好(よ)し孤雲(こくうん)を逐(お)ふて去(い)り 外物(がいぶつ)相逢(じゆほう)ふて満月(まんげつ)ぞ迎(むか)ふ 此(こ)の地身(ぢみ)に檢繫(けんけい)けんけいなしといへども 何(なに)すれど寸步(すんぷ)も門(かど)を出(い)でて行(い)かむ

(罪を受け、流されてあばら屋に住み、生命は助かるまいと恐れおののき、背を曲げて身の置き処もない。都府楼も屋根の瓦を家の中から見るだけ、観音寺も鐘の音を聞くだけで

ある。心の思いはちぎれ雲とともに飛び去って、満月を見るような気持ちで、万物と接している。大宰府で身を拘束されることはないが、お咎めを受けた身を思えば、一歩でも門外に出て行けようか。身を慎み外に出ないで過(こ)している)(不遇な時であっても不平を言わず、与えられた境遇を受け入れている)

自分は悪いことはしていない、早く家に帰らせてほしい、と願いながら道真は、延喜三年(九〇三)二月二十五日、失意のうちに大宰府で没した(五十九歳)。

なお紫草のゆかり、道真公の和歌が遺されている。つくしにも紫生ふる野辺はあれど

なき名悲しむ人ぞ聞こえぬ 筑紫にも紫草は生えて(自分のような)ゆかりの者はいるが、世間から名前も忘れられ悲しむ人もいない。

前掲の漢詩三首に通じる、道真公の思いに感涙する。

(六)「遺骸の車を曳く牛が止まった場所が、墓所となる(安楽寺天満宮)」

道真公の葬送は、ご遺骸を乗せた車を牛に曳かせ、門弟味酒安行(うまさけやすゆき)ほか僅かの人に守られながら東北に進んだ。途中で牛が止まって動かなくなり、ここがお墓の場所であるうとして埋葬された。道真左遷に門弟としてただ一人お供した安行は、そのご墓所を離れず追善供養して二年半、延喜五年(九〇五)に許されて道真公の御殿(御廟殿)を建てることになり、同十年安楽寺を建立した。太宰府天満宮の創祀である。その安行の子孫が代々太宰府天満宮に仕え、神となられた道真公をお守りされて来たという驚くべき事実、なんと現在の権宮司味酒安則氏はその四十二代目に当たられると拝承した。三月八日味酒権宮司様に拝眉(びやくま)できたこと、それは道真公様のお傍に少し近付かせて頂



道真公歌碑 (筑紫市紫駅)

いたような、恐れ多い感覚となつて筆者を痺れさせた。

### (七) 没後六年時平急逝、その後宮中に落雷死者多数

#### 醍醐天皇も病氣崩御―道真の怨霊のためとされ、京都に祠が建てられる(北野天満宮)

京の都で政権を握っていた時平は、延喜九年(九〇九)三十九歳の若さで没した。延喜二十三年(九三二)中宮(醍醐天皇の妃・穩子(基経の娘・時平の妹)が生んだ皇太子保明親王が二十一歳で没する。

醍醐天皇はその直後、道真を元の右大臣に復位させ、正二位に上げてその罪を否定した(道真没後二十年にしての名誉回復)延長八年(九三〇)宮中清涼殿に落雷があり、大納言藤原清貫は胸を裂かれて死亡、その他重臣四人も焼かれて死亡した。醍醐天皇も怨霊おんりょうの恐怖からか体調を崩し、九月皇太子寛明親王(八歳)に譲位(朱雀すじやく天皇)して崩御した(四十六歳)。

道真の怨霊騒ぎは、都で道真のご託宣(お告げ)を受けたという多治比文子(たじひのあやこ)などによつて祠(ほこら)が作られ、場所を移して御霊をお祀りした(北野社)。そして大暦元年(九四七)六月、北野に社殿が建立されたのが北野天満宮の始まりである。それでもまだ怨霊は鎮まらず、内裏が三度も焼けるなどした。

永延元年(九八七)一条天皇は初めて北野社で祭祀を行い、正暦四年(九九三)八月道真に左大臣正一位、十月に太政大臣が贈られた。寛弘元年(一〇〇四)には北野社に行幸した。

翻つて、自ら怨霊たらんとは露ほども思われなかつた道真公である。しかしその霊魂を、世に言う怨霊と逆に畏怖した朝廷と政権が、鎮魂祈願して霊を鎮め、神格化を進めて善神に転化されたのである。京都北野社は時平の弟筋が摂関家となつて保護を強め、太宰府天満宮にならつて、菅原家から別当職が輔任された。

### (八) 道真公の二廟に創建された太宰府天満宮の神聖

京において北野社が創られる頃、安楽寺は安楽寺天満宮と呼ばれ、その後勅命で「天満大自在天神」(てんまだいじざいてんじん)の「神位」を贈られ、名譽を回復された道真公の嫡流が別当職に任じられた。以来連綿として継職され、明治四年には太宰府神社、戦後太宰府天満宮と改称された。



太宰府天満宮 本殿 (重文)

現在の西高辻信宏宮司様は、第四十代に当たられると拝承する。菅原家の嫡流である高辻家、その分家の西高辻家と味酒家の子孫によつて護られてきた太宰府天満宮の神聖な存在感、天神信仰の純粹性に魅せられる。しかも太宰府天満宮は、ご墓

所の上に本殿が建立され、道真公は今もそこに坐(おわ)します。配流二年間に詠まれた多くの漢詩、それらを貫く崇高な詩境と透徹した至誠の赤心は、そのまま学問・詩文の神に昇華されていったものと拝察する。

太宰府天満宮様に、道真公の現身(うつつし)みを感じさせて頂けたような有難さの思いに感動しつつ、学問・至誠の神様に深くお礼を申しあげ、コロナ禍、厄除けの神様のご神徳にお祈りしたい。

### 結

晩年になつて太宰府に赴任し愛妻を亡くした旅人は、人生悲嘆の境にあつて「世の中は空し、悲しかりけり」と詠んだ。しかし彼は憶良と切磋して開眼、漢文と和歌の組み合わせという趣向で、新しい日本の和歌創りに挑戦した。酒を愛し人を愛した旅人なればこそ、その人間性の魅力と情熱で筑紫歌壇の中核となり、「梅花の歌三十二首」と「序文」の華を咲かせることができた。悲

嘆からの挑戦が、予期せざる新元号「令和」の誕生にまでつながった。和歌の新境地を拓いた泉下の旅人に、心からのエールを贈りたい。

一方、右大臣から人生のどん底に突き落とされた道真公の悲痛さは、筆舌に尽くせまい。しかし、新たな苦難の境涯で詠まれた三十八首の漢詩には、人に対する恨みや呪いの言辞は見えない。前掲の三首でも、悲痛な心情は吐露しても自らの運命を受け止め、苦しみに耐えながら人間道真の純心を、むしろ神仙の境地に移行されたのではないか。そこに道真公の新しい詩境が生まれ、その究極の詩心が、新しい詩文の神としての学徳に涵養されたものと思料する。人から神になられた道真公、その人と神に、深い感動と感銘を覚え低頭する。なお、道真公には「新撰万葉集」も伝えられており、和歌の名手でもあつたことを付記して筆を擱おく。

(横野万葉会)

備考 本稿執筆に関して、太宰府天満宮文化研究所様から

『五言絶句双幅』(伝菅公筆)の掲載許可条件として、

地域雑誌『あしたづ』第二十三号と『横野万葉会講演資料』を各一部ずつ送付することになっている。旅人

と道真公の素晴らしい歌碑写真も追加貸与頂いた。

筆者はその責任を痛感、全身全霊を捧げて努力し、

来春三月には太宰府天満宮様に各一部ずつお届けし

て、ご神恩に感謝しお礼を申しあげたいと念じている。

【参考文献】菅原道真と太宰府天満宮(上下) 天満宮菅公会

・天神絵巻―天満宮の至宝 太宰府天満宮

・天神さまと二十五人 天満宮文化研究所

・天神さま―その詩歌とこころ 天満宮学業社本部

【詩の解釈】研究所貸与コピーを筆者の責任で簡略化した。

【写真】研究所より貸与の二葉以外は、筆者が撮影した。

【敬語】旅人・道真は敬称略、道真逝去後は道真公とした。